『彼女たちの文学――語りにくさと読まれること』

飯田祐子[著]、2016年、名古屋大学出版会

［評者］
宇野史也
UNO Fumiya

これまでのフェミニズム批評において理念とされていたのは、〈女〉というカテゴリーとしての抑圧の経験を読むことや、〈男性作家〉に対する〈女性作家〉の称揚を経て〈女〉というマイノリティの固有の主体を形成することだった。本書はそうした批評に二つの角度から切り込んでいく。一つは女性たちが「固有の主体」に統一される際に忘却される個々の多様性に目を向けることであり、もう一つは〈女性作家〉というカテゴリーを読者と作者の間の関係性とジェンダーの力学の観点から捉え直すことである。

フェミニズム批評からジェンダー批評、そしてクィア批評へと、マイノリティ文学論がより多様性に開かれた方向へ進歩してきた今日において、あるカテゴリー内の個別具体性へと分け入る本書の視点は重要な意義を持つ。その視点から個々のテクストを読むということが差異の発見に繋がると同時に、既成のカテゴリーや規範を解体する契機にもなり得るだろう。

本書は大きく分けて4部から構成されており、その中にさらに細かい分節として15の章が設けられている。個々の章で対応する作家を1人取り上げて、その作家の具体的なテクスト分析に沿って議論が展開されていく。

まず、第1部（1章－5章）では「被読性」と「応答性」という本書の鍵となる概念が具体的な作品分析を通じて示される。最初に問題となるのは文学がジェンダー化されているという点である。語りの場が用意されていない〈女性作家〉というマイノリティは常に、テクストの向こう側の読者である他者を意識する。これは、読まれることへの意識、「被読性」である。〈女性作家〉という書く主体はこの読者からの呼びかけに応答する形で立ち上がる。その結果として、自己と規範との間の亀裂が言い淀みや語りにくさとして表れることになる。これが「応答性」である。著者は、こうした特徴を〈女性作家〉の共通項、「主体性の揺らぎ」として提示する。第5章の松浦理英子の作品分析を通じて、「被読性」と「応答性」を、読まれることへの欲望、他者へと開かれた語りへと結びつける。

第2部(6章－9章)では、〈女〉という主体が不安定であること、また

それゆえに動的であるということを、〈女〉を構成する規範との交渉という観点から論じている。「〈女〉が意味するものは文脈や場によってさまざまである。……〈賢母〉〈良妻〉、あるいは〈主婦〉」(p.131)。〈女〉というカテゴリーが重層的に決定されることを示すために、近代が産んだ女性カテゴリー間の不一致や自己との齟齬がもたらした女性の亀裂を例にとる。特にそれを「内助」という性別役割と「女学生」という新しい女性像との背反から確認する。第6章、清水紫琴と北村透谷のテクスト分析において、規範と自己との葛藤があることが示され、第8章の宮本百合子の分析では、6章で示された問題を詳細に検討している。特に、語る主体を形成する試み、そのために個別具体的な経験に意味付けをし普遍化しようとする試みに光が当てられる。そこで著者が最も強調するのは、全体の文脈にそぐわない部分である。それは、意味化のプロセスの失敗として提示される。この失敗した語りに認められる「応答性」は、規範によってもたらされる主体の亀裂を物語っている。

第3部(10章－12章)では、第2部で見た主体の重層決定性を、帝国主義や植民地主義といった、より大きな力との関係性から考察している。第10章では、奥村五百子を例にとって、帝国主義の女性動員から、ジェンダー規範と国家イデオロギーとの相互補強的な関係性を捉えようとする。これらの力の共犯関係が主体を決定する一つの要因であるとともに、個々の亀裂を隠蔽することにもつながると著者は論じる。第11章、牛島春子『祝といふ男』や第12章、林芙美子の『従軍記』の植民地主義言説の再生産という役割を持ったテクストの分析において示されるのは、その役割におさまりきらない齟齬の部分である。それは、満州人と日本人の優劣をステレオタイプに描く一方で、占領者という当事者意識や、戦争に対する感傷といった語り手の視線が物語に組み込まれているという点に表れている。ここには、強固な規範に同一化し得ない個人性＝主体の揺らぎという隠蔽されたものが、「応答性」として書く行為を通じて表出しているのだと筆者は述べる。

結びとしての第4部（13－15章）では、これまでに見た〈女性作家〉たちが発話の場の力学の中でどう生き延びていくのか、という語りの方法が追及されている。これまで一貫して、発話の場、つまり読者との関係において〈女性作家〉の語りを論じてきた筆者であるが、ここで再び語り手の個別具体性へと分け入る。ここで焦点が当たるのが、言葉の帯びる身体性である。語り手の経験や感覚、情動といったものから生まれた言葉は容易に共有され得ない。15章の多和田葉子の『飛魂』においては「音読」という言語行為の分析を通して、外部から侵入してくる言葉を身体感覚として知覚するあり様が記述される。身体性を帯びた言葉は、意味化から逃れ

るとともに語り手に固有の感覚的な言語でもある。こうした言語は、主体の亀裂を含んだ固有の語りであり、発話の場において理解不能なものとして作用する。筆者は、こうした言語使用を語り手の語ることの快楽へと繋げることで、マイノリティである〈女性作家〉たちが生き延びる方法を模索しようとしている。

以上が本書の内容である。本書が行ってきた分析は、フェミニズム批評を多様性へと開いたと言えるだろう。それは、「読む」という受け手側の行為に強く作用する。本書は一貫して、〈女性作家〉という書く主体の不安定さを共通項として様々な切り口から描出することに取り組んできた。それは、主体の亀裂が「被読性」と「応答性」となって個々のテクストに表れているということ、そのあり様は個人によって様々であること、さらにそうした語りは私たち読者との交渉に開かれているということである。こうしたインタラクティブな読みの可能性を本書は提示している。

ただ、言葉の身体性を快楽へと繋ごうとする著者の試みは、これまでの分析で開かれた可能性を閉じてしまう結果にはならないだろうか。それは結局のところ、理解不可能なものを括弧で括っているに過ぎず、また、到達不可能な地点に解決策を見出すユートピア思想でしかない。可能性を広げるためには、困難ながらもそこに新しい意味を付与し続ける必要があると評者は考える。そうすることで語り手と読み手を橋渡しすることこそが批評家の役割ではないだろうか。重要なのはそうして抽出した言語化し得ない個人性が発話の場の力学の中でどのように機能し得るのか、どのように規範を揺るがし得るのか、また揺るがし得ないのかということを検討することだろう。

以上の点を踏まえて、結論ではなく可能性の提示が本書の目的だと評者は考える。クリステヴァ的なユートピア思想に一応の解決を求めることがフェミニズム批評の行き詰まりだとするならば、残念ながら本書もその例に漏れない。しかし、〈女性作家〉の多様性に目を向けつつ、それを他者との対話の可能性に開いたことに、今日のジェンダー批評における大きな意義がある。発話の場の力学を作用させるのが語り手と聞き手であるならば、それを揺るがし得るのもその両者である。規範に囚われない多種多様な意味付けを行うために、テクストに滲んだ「応答性」に鋭敏になることこそ、われわれ読者にとって必要なことではないだろうか。

Copyright © The Comparative Civilizations Society of Rikkyo University